

橘玲著「言ってはいけない 残酷すぎる真実」新潮新書

Akira Tachibana wrote “Ittehaikenai ZankokusugiruShinjitu” ShinchoShinsho

志村 浩 二

おそろしい本である！書籍名をもじって言うなら、この本は「読んではいけない」（笑）冗談はさておき、当書籍はご存じの通り、平成29（2017）年度のベストセラーであり、重版もなされ、その当時は書店を賑わしていた覚えがある。

筆者は我ながら変わった癖（？）があつて、ベストセラーになった書物は当該年にはなく、わざとブームが少し落ち着いた翌年以降に読むようにしている。ただ、そうすると、流行に踊らされない「その本の本質」が読めるような気がするので、そのスタイルは続けている。それでこの本書であるが、新書サイズながら、おそらく読者の脳髓に訴えるインパクトは、研究書並みであろう。

単純に感想を述べるなら、「受けとめたくないと思いつつも首肯せざるを得ない」・「理解したくないと思いつつも納得せざるを得ない」…さしづめ、そんなところである。

筆者も臨床心理士の端くれであるので、いわゆる比較行動学（サル学）はそれなりに学んできた覚えはある。たとえば類人猿中、最も力の強いゴリラは密林に生き残ることができ、草食を続けられている。そして密林から（ゴリラに）追い出されたチンパンジーは森林に棲まうことになり、雑食の道を選ぶことになる。さらにチンパンジーとの生存競争にも負けたヒトは草原に生活するしかなくなり、非力ゆえに集団を形成し農耕や狩猟を行うことになった…これが進化である。これは類人猿のみならず、無脊椎動物も魚類もは虫類も同じように生き残りをかけた意味では同様である。

また、その進化の仕方に対応して生殖形態が整い、ゴリラは長老格のシルバーバックが未成熟ゴリラの成育をする「託児型」、チンパンジー（ボノボ：ピグミーチンパンジーを含む）は雌チンパンジーが決死の家出をする中での「乱婚型」、そしてヒトは血縁が肩を寄せ合うことで家族を名乗り、タブーを形成する「命名型」である。これらはいずれもが、その「種」なりに「近親姦を防止＝種族維持のための適正遺伝子確保のための戦略」装置として機能している。それがヒトの場合、タブーでもある。

環境に合ったものが生き残り、それが以降の種となる。有名過ぎるダーウィンの進化論（ダーウィニズム）だが、これに倣ってできたのが「社会的進化論（ソーシャルダーウィニズム）」である。つまり生物学的な進化だけでなく、人類社会も進化論的に優秀な人類に淘汰される…この是非はともかくとして、この考えが時代の為政者に恣意的に解釈されるこ

とで、選民思想に始まり、「人種差別」ひいては「優性思想」に用いられたことは、あまりにも悲惨な歴史的事実である。

閑話休題、本書の中にはこの進化の考え方が軸にあって、たとえば男性が浮気（不倫）を起こしやすい理由、女性が（身体的あるいは社会的・経済的に）強い男性を選びたがる理由、はたまたDV（配偶者等暴力）の男女関係がなぜに別れ難いのか等も述べられている。

人間の意志や心理とは、まるで氷山の一角のような、取るに足りない「微小な観念」に過ぎないと切り捨てられているようである。それよりもびくともしない大きな「生物進化」が氷山の大きな潜伏部をなしていて、実はヒトの行動を左右していると…私たちはそれに突き動かされるからこそ、「ときに意識的には考えられない過ちを冒してしまうのだ」と、本書は語っている…ように感じるのは、読んでみれば誰もが陥る感覚であろう。

さらに、もっと怖いのは、著者が度々強調している「遺伝的要因」の大きさである。

心理学関係者なら誰もが知る「双生児研究」だが、一例を挙げると、一卵性双生児における統合失調症の遺伝率（厳密には集団一致度）は約6割とされる。即ち、生後すぐに別々に育った一卵性双生児でも、双方ともに統合失調症になる可能性が、60%生起することになり、つまりこの疾患はかなり遺伝に影響されることになる。本書は、その他の様々な精神障害（心理社会的な不適応）のそれも示していて、精神科的病理における遺伝性の高さを傍証している。たとえば、過去に内因性うつと呼ばれていた疾患も60%程度、近年取り沙汰されることの多い神経発達障害系で概ね80%にも達する。一方で「酒飲みの家系」と揶揄されるアルコール依存症は55%と、上記に比べると案外低い。いずれにしろ、これだけ心理社会的な不適応に遺伝の高さを前面に出されると、身も蓋もないと言うか、「人を育てる」後天的環境の重要性を「大前提に」仕事している、教育者・福祉関係者からすると悲しくなってくる。

加えて、発症・発病にその関与度が少ない（低い）環境要因を眺めても、共有環境（つまり家族のような同一環境下で過ごす）の寄与は極小で、非共有環境（共に生活をしていない学校や友人、施設等）が、病理発現のための若干の左右要因であるとも述べている。これを字面通りに受け取ると、人の成長や治療・回復に家庭環境の影響が小さい以上、私たちの業務である家族支援など浅薄な意味しか持たないことになってしまう。長年に亘って心理学的地域援助を標榜し、子ども・子育て支援をしてきた筆者にしてみれば、この結果こそ非常に虚しくもなってくる。一方で、どうしてもこの結果を認めがたい筆者の気持ち（おそらく、事実の怖さから防衛的否認が心理的に起きたのだろう…）もあり、何とかそうでないことを明かしたい気持ちにも襲われた。

実は本書は、新書と言うサイズと紙面上の制約もあって、著者の見解のエビデンスは、概ね参考・引用文献に示されている。この私的な否認のため、その中のいくつかも参考の

ために拝読してみた。

実はそこに、著者が本当に言いたかった核心があるように感じた。

つまり、生物進化学的・進化心理学的には、人間の意識や良心・道徳などはちっぽけなもので、もっとDNA継承的な動因にヒトは突き動かされていること。そして、様々な精神病理も遺伝の影響が大きいので、後天的な環境が貢献できる余地も少ないこと。だから、「諦めなさい!」と述べている訳ではない…むしろ、「環境を軽視したり、環境整備から放置されたりすると、人間は思った以上に非道徳的衝動に傾きやすく、また精神病理に陥りやすい」。だからこそ『『集団生活と言う方法で進化的に生き残った種』であることを強く意識して、「他者への気持ちを働かせ、お互いが支え合う関係性を殊更に自覚しないといけない!」、特に、そこには一緒に生活をしていない他者、つまり「非共有環境の果たす割合が大きい」と、著者の主意がここにあったことが、参考・引用文献までを踏まえることで理解できた。

まるで筆者が高校時代の倫理社会の時間に習った、荀子やホブズ等の性悪説的なニュアンスを彷彿させる結果であったが、特に近年、対人関係心理学的解釈だけでは理解困難で、かつ物騒な事件が多い中、倫理的で道徳的な自己に至るには「相当の意識が必要な自覚化」と、「人類としての生存手段＝周囲との協調と共感」にあることを再認識するには、充分過ぎるインパクトのある著である。

最後になるが、この本は、『立ち読み』してはいけない・『しっかり読まなく』てはいけない…(笑)。